

群 教 セ	E03 - 03
	平17.231集

不登校傾向にある生徒への援助・指導

—— 本校の実態に即した、
生徒支援モデルプラン作成の試み ——

特別研修員 栗原 飛鳥 (県立大間々高等学校)

《 研究の概要 》

研究の背景として、「本校に入学した以上、3年間充実した高校生活を送り、希望の進路を実現した上で、無事に卒業させたい。」という研究者の思いや願いがある。そこで、本研究は、不登校生徒や不登校傾向生徒が学校復帰を果たし、卒業に向けた、充実した学校生活を送ることをねらいとして、各方面から情報を収集し、本校独自の支援体制の確立を目指す試みである。

キーワード 【教育相談 不登校 中途退学 単位制高校 援助指導 中高連携】

I 本校の実態

1 学校の概要

本校は、平成10年度より単位制に移行した、創立100年を越える普通科の伝統校である。必修科目以外は自分で科目を選択して学ぶシステムで、1年次での選択授業はごくわずかであるが、2、3年次での選択授業は非常に多く、自分の進路に合わせた科目を選ぶことができる。3学年9クラスで在籍者数は約330名である。通学地区は、大間々町、笠懸町、桐生市、旧新里村などの近隣の市町村が多いが、遠くは前橋方面から通う生徒も少なくない。通学手段は、自転車や電車通学が多いが、最近は家族による送迎も増加している。卒業後の進路については、進学、就職の割合はほぼ50%ずつであり、進学先はいずれも指定校であるが、近郊の大学、短期大学が挙げられ、就職先は製造業が多く、県内の一流企業へ就職する生徒もいる。

2 生徒・家庭の状況

学習面については、高校入学時の学力は決して高くないと思われるが、入学後、次第に能力を伸ばし始め、3年生では、希望の進路を実現させる生徒が数多い。性格は、優しく穏やかで、他人を思いやることができ、クラスの中などで、溶け込めない生徒がいると、気遣うことができる生徒が多い。また人なつこい生徒が多く、学年の枠を越えて付き合うため、良い意味でも悪い意味でも、上下関係があまり感じられない。

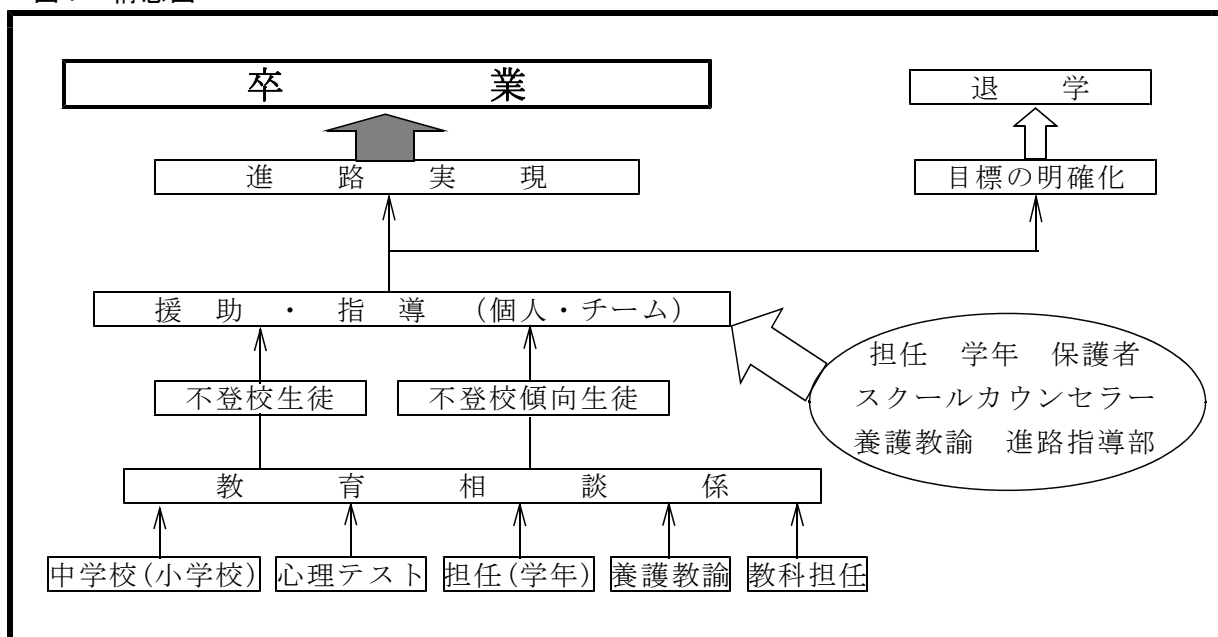
家族構成は、一人親の家庭が少なくない。そのためか子育てに不安を感じつつ、日々の生活を送っている保護者も多い。経済的に厳しい家庭もあり、授業料免除の生徒や授業料などの滞納者も多い。また「仕事の都合」などの理由により、PTA総会や保護者会の出席率は低く、三者面談の日程も組みづらい現状がある。

II 研究者の問い

本校では、生徒指導部の中に生活指導係、教育相談係などが位置付けられており、生活指導係が主に「喫煙」や「3ない運動違反」など反社会的な問題に、教育相談係が「不登校」などの非社会的な問題に対応している。また本校の問題行動であるが、反社会的な問題を起こす生徒の割合が、非社会的な問題を起こす生徒よりも非常に多く、生徒指導部の対応は反社会的な問題に割かれる時間の方が圧倒的に多い。そういった反社会的な問題を起こす生徒は、より重大な問題行動を起こす生徒を除いては、友人などの助けを借りながらも、進路を決定し、どうにか高校を卒業していく。しかし、非社会的な問題のある生徒はそうではない。

本校には、中学時代に不登校を経験している、また経験していた生徒が、多くはないが入学してくる。そして、心機一転登校できるようになる生徒と、引き続き不登校になってしまう生徒に分かれる。更に、高校入学後に不登校に陥ってしまう生徒もわずかではあるが、存在する。このような不登校に陥ってしまう生徒は、単位未修得の科目

図1 構想図



がかさみ、3年間での卒業が見込めず、結局は退学を余儀なくされてしまう現状がある。(最大6年間在籍できるが、4年間以上在籍する生徒は大変まれである。)

そこで、本校の実態に即した生徒支援をどのように進めたらよいかとの問いをもち、本研究では、本校独自の生徒支援モデルプラン(試案)を作成する。

Ⅲ 研究者の思い

本校に入学した以上、3年間充実した高校生活を送り、希望の進路を実現した上で、無事に卒業させたい。もし仮に途中で退学を希望した場合であっても、次の目標を明確にさせてから、進路変更を図りたい。(図1参照)

Ⅳ 各調査とその考察

生徒支援モデルプラン作成に当たって調査・分析を行った。

1 退学者実態調査結果から

高校入学後、不登校になるケースには、高校入学直後から不登校になるケース、夏季休業明けに不登校になるケース、冬季休業明けに不登校になるケース、2年生進級後に不登校になるケースの

大きく4つのパターンが見られる。

詳細に見てみると、平成14年度入学生のうち、中学時不登校生徒は5名(うち3名は登校し、2名は引き続き不登校)。新たに高校入学直後に1名、夏季休業後5名、冬季休業後2名、2年進級後に1名、不登校になってしまった。(次頁図2参照)

考察

まず第1に中学時代、不登校だった生徒が高校入学を契機に登校するケースがあるということである。第2に1年次に不登校に陥ってしまう傾向が非常に強い。見方を変えれば、2年進級後以降に不登校になるケースはまれであると言える。第3に長期休業後に不登校になるということである。

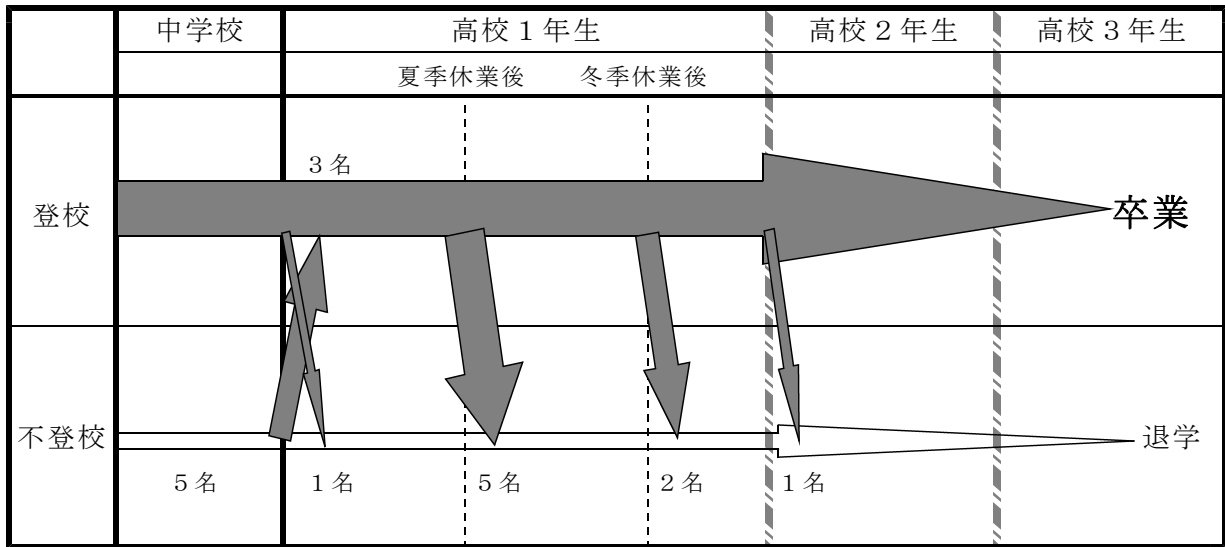
以上のことから、1年時の対応、特に長期休業明けの対応が重要であることが分かる。

2 生徒インタビューから

不登校経験のある卒業生や3年生にインタビューし(1、2年生へのインタビューは、配慮が必要なため)、不登校の原因をつきとめ、生徒への対応、特に1年生の不登校傾向にある生徒への対応を再考し、生徒を学校に引きつけるようにする。

- 不登校生徒・不登校傾向生徒へのインタビュー(抜粋)
- ・カリキュラムの認識不足

図2 登校・不登校の変移(平成14年度入学生)



「中学時代に思い描いていたものと違う。1年次から好きな科目が取れると思っていた。」

- ・友人関係
「クラスに溶け込めない。」「クラスメイトについていけない。」「クラスに話せる友達がいない。」
- ・学習面
「勉強が分からない。」「不登校が続いたため、学習面で遅れてしまい、もうついていけない。」
- ・生徒指導面
「校則が厳しい。」「『何でもあり』だと思っていた。」
- ・学校外の問題
「有職少年とのつながりから、昼夜逆転してしまい、朝起きられない。」

○学校復帰した生徒へのインタビュー(抜粋)

- ・友人関係
「クラスに馴染めた。」「クラスに居場所がある。」「周囲の生徒が気遣ってくれた。」
- ・教師の態度
「先生が親身になって話を聞いてくれた。」「話せる先生がいた。」

考察
生徒の認識不足や学校外の問題を除けば、生徒同士のかかわりや教師が生徒と接する態

度、また学習面での援助が重要であることが分かる。

3 他校の実践から
県立M高等学校の実践

- [学校の実態]
- ・中学時代に不登校だった生徒が多く入学してくるが、学校生活に適応し、能力を発揮して、四年制大学や短期大学へ入学する生徒もいる。
 - ・専門医との連携を要する生徒も入学してくる。
 - ・学習障害や多動・多弁、寡黙、自閉などの傾向の生徒がいる。
 - ・不登校体験生徒のほとんどは卒業していく。
- [学校の対応]
- (担任、学年と連携し、チャンス相談、呼び出し相談を行う。)
- ・1年生については、中高連携、家庭訪問、三者面談、二者面談、諸検査を通じて、情報の収集を行う。
 - ・教育相談係として、担任から支援を求められる生徒はもちろん、それ以外の生徒も対象に活動を行う。
 - ・多様化する生徒の特性をつかみ、学校組織全体で支援する。
 - ・長期休業中に特別補講を行い、欠課時数の補填をする。
 - ・生徒にとって居心地のよい、学校環境づくりを行う。

考察

情報収集、学習面の対応、環境づくりも含めて組織で動くことの重要性が伺える。

4 文献・先行研究から

(1) 『生徒指導上の諸問題の現状調査(平成16年度)』(抜粋)文部科学省

4. 高等学校における不登校

不登校となった直接のきっかけは、「学校生活に起因」と「本人の問題に起因」がそれぞれ約40パーセントを占め、残りが「家庭生活に起因」となっている。

不登校状態が継続している理由は、「無気力」が最も多く、続いて「不安など情緒的混乱」、「複合」の順になっている。

(2) 『中1不登校の未然防止に取り組むために』(平成17年7月)国立教育政策研究所 生徒指導研究センター

1 中学校における4月最初の対応例

① 基礎的情報の収集と分類

- (1) 新中学1年生の全生徒について、小学校4～6年生時の欠席状況の情報を入手する。(3月末)
- (2) 「不登校経験あり」群、「不登校経験なし」群などの分類を行っておく。(4月初め)

② 対人関係への配慮

- (1) 学級編成を工夫する。(4月初め)
- (2) 学級開きでゲームなども交えた自己紹介を行う。(4月初め)

2 中学校における1学期の対応例

③ チームによる対応

- (1) 「不登校経験あり」群の場合、早期に(たとえば、累積欠席日数が2日になった時点)対応チーム(生徒指導主事、養護教諭、学級担任、スクールカウンセラーなど)を発足させる。
- (2) 本人や保護者との対応、その反応などを記した個人記録表を作成する。
- (3) スクールカウンセラーなどによる見立て(情緒的不安か否か)を行い、それに応じた対応責任者を決定する。
- (4) 週に1回程度のチーム会議を行う。

④ 対人関係の改善

- (1) 苦手意識を克服させる。

- (2) 自己有用感・自己存在感を獲得させる。

⑤ 学習面の改善

- (1) 「分かる」授業を実施する。
- (2) 習熟度別・少人数の授業を実施する。

3 中学校における夏期休業中の対応例

⑥ 夏期休業中の取組

- (1) 欠席が目立つ生徒に教育相談などを行う。
- (2) 学業不振の生徒に補習授業を行う。

(3) 『2004年度公立高校不登校生徒調査結果』

群馬県教育委員会(『上毛新聞』平成17年11月18日付け)

高校の不登校に関する調査は初めてで、不登校生徒は647人(全日制466人、定時制181人)に上った。

文部科学省が行った全国調査の一環として行われ、74校を対象に小、中学校の調査と同様、病気や経済的理由を除く30日以上長期欠席者を不登校とした。

不登校となった理由は、『不安』『無気力』など心に関するものが約35%と最も多く、「友人関係」が約17%で続いた。

対応策として、県教委は17日の県議会決算特別委員会で、①相談体制の整備②担任教員の資質向上③県内8区域に配置した巡回カウンセラーの面談を挙げた。

考察

情報の収集の大切さ、対人関係への配慮、チームによる対応、学習面の対応の重要性が挙げられている。

5 有識者のアドバイスから

粕谷 貴志先生(都留文化大学講師)から

(1) 高校入学時の学校生活認知と学校適応

学校生活認知では、不安、関係回避、親近・期待の3要因が見出され、これらの3要因はそれぞれ学級満足度と関連があることが明らかになった。さらに、学級生活認知の3要因のうち2つ以上の要因が良好でない場合に学級満足度が低下することが明らかになった。よって、高校入学時の適応援助においては、生徒個人の不安、関係回避、親近・期待の認知レベルのアセスメントにもとづいて個別援助を行うと同時に、これらの3つの要因からの新入生全体に対する予防的・開発的援助を

行うことが有効である可能性が示唆された。

(2) 構成的グループ・エンカウンター(以下SGE)

SGEを行うのは、1年生の4月初日がよい。2日目では遅い。反社会的な問題行動を起こす生徒にとっては、仲間づくりの場になってしまうかもしれないが、不登校生徒を救うには初日がよい。

(3) 中学校との連携

中学時代をどう過ごしてきたのかを情報を収集する。

(4) 9年間の義務教育

小学校、中学校の9年間の人間関係の事から入っていかないといけない。

(5) 具体例

(1年間でクラスの1/5がいなくなる学校)

新生生の顔と名前を覚え、1週間に一度声掛けをするようにしたところ、退学者が激減した。

考察

不安、関係回避、親近・期待の3要因が欠けること、構成的グループ・エンカウターの重要性、連携の大切さが挙げられている。

V 考察

「IV 調査と各考察」から読み取れることは、自己有用感や自己存在感を獲得させるための1年時の初期対応、具体的には生徒同士の対人関係への配慮や教師の生徒への接し方、また学習面での対応が重要であるということである。そのためには様々な情報を事前に入手し、組織で対応することも重要であることが分かる。

VI モデルプランの試作(図3参照)

1 学校全体、又は担任としてできること

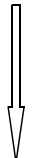
(1) 声掛け運動

生徒に自己有用感や自己存在感を獲得させるために、学年の生徒、少なくとも担任するクラスの生徒の顔と名前は覚え、声掛けを行う。

(2) 対人関係ゲーム・SGE

入学直後、またクラス替え直後に、自分から積極的に話せない生徒も参加でき、自己有用感や自己存在感を獲得させられるように、下記に示すような対人関係ゲームやSGEを中心に行

図3 モデルプラン

	学校全体、また担任として		教育相談係として	
		生徒・保護者等に		生徒・保護者に
3月	入学前	(1) 新入生を覚える。 	(1) 前段階	・ 高校入試合格者の出欠データ入手する。 ・ 中・高情報交換会の情報(特に出欠状況)入手する。
4月以降	入学直後から	(1) 声掛け運動を行う。 (2) 対人関係ゲームやSGEを行う。 (3) 補習を行う。	(2) 第1段階	・ 担任等から情報を入手し、不登校生徒を抽出する。 ・ 心理テストから不登校・不登校傾向生徒を抽出する。
	長期休業中	(3) 長期休業後の考査に備え、課題を与え、補習を行う。		
8月下旬以降	長期休業後	(4) 欠席のある生徒を対象に教育相談係と連携し、面談する。 (3) 考査実施後も補習を行い、フォローを行う。	(3) 第2段階	・ 前段階や第1段階で入手した情報を基に、教育相談係会議を開き、対応を検討する。 ・ 中学校、また小学校と連携する。
		(5) 中学校訪問や中高情報交換会で、中学校側へ生徒の状況報告を行う。	(4) 第3段階	・ 第2段階を基にチームで援助・指導する。

い、クラスに自分の居場所を作らせ、仲間とのきずなづくりができるように支援する。

バースデーライン	トラストウォーク
アドジャン	ジャンケン・ボーリング
探偵ゲーム	

(3) 課題や補習

継続的に課題を与えたり、補習を行ったりし、不登校期間の学習の遅れやつまずきを取り去り、その後に実施される考査に備える。(本校では規定により、欠課時数の補填はできない。)また考査後もフォローを行う。

(4) 長期休業後の面談

長期休業後に欠席が見られる生徒を対象に教育相談係と連携し、面談を行う。

(5) 状況報告

年2回実施される中学校訪問や中学校・高等学校生徒指導対策協議会(中高情報交換会)の場で、中学校側に生徒、特に不登校生徒の状況を報告する。

2 教育相談係としてできること(図1参照)

(1) 前段階(3月~4月)

- ・高校入学試験合格者の出欠データ(中学校時代のもの)を入手する。
- ・高校入学前に実施される中・高情報交換会で、担任団が受け取る情報(特に出欠状況)を教育相談係も入手する。必要があれば小学校とも連絡を取る。

(2) 第1段階(4月~)

- ・担任(学年)や養護教諭などから情報を入手し、不登校生徒や不登校傾向にある生徒を抽出する。
- ・心理検査の結果を活用し、不登校傾向にある生徒を抽出する。

(3) 第2段階

- ・前段階や第1段階で入手した情報を基に、教育相談係(スクールカウンセラーも含む)で対応を検討する。
- ・中学校、また小学校と連絡を密にする。

(4) 第3段階

- ・不登校生徒、または不登校傾向にある生徒に対し、高校生活を充実したものにするためにチームで援助・指導を行う。その中では、進路指導部とも協力し、卒業後の進路も絡めて対応する。

VII まとめと今後の課題

実施時期の問題などがあり、今年度は情報収集と調査、そして多少の実践で終わってしまい、大変心残りのある研究となってしまった。

生徒インタビューから、文献・先行研究では表出していない不登校の原因が出てくる可能性もあるのではないかと考えていたが、特に目立ったものは出ず、似たような原因であった。またどの文献・先行研究の対応策にも似たようなことが書かれていた。言い換えれば、「これをやれば不登校はなくなる」という、特効薬はない、王道はないということであろうか。

3月から始めることができる作業など、今年度中に始められるものもあるが、来年度4月からモデルプランを実施することによって、不登校生徒や不登校傾向生徒が、少しでも本校に魅力を感じ、学校生活に適応し、そして無事に卒業できるようになれば良いと思う。

(主な参考文献)

- ・國分 康孝 監修
『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集』
図書文化社(1999)
- ・國分 康孝 監修
『エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 Part 2』
図書文化社(2001)
- ・田上 不二夫 編著
『対人関係ゲームによる仲間づくり 学級担任にできるカウンセリング』
金子書房(2003)
- ・『生徒指導上の諸問題の現状について(平成16年度)』
文部科学省
- ・『中1不登校の未然防止に取り組むために』
国立教育政策研究所 生徒指導研究センター(2005)

(担当指導主事 武藤 榮一)